



幼児期の環境教育が基盤 サステナビリティを輸出へ

スウェーデン企業には、CSR (社会的責任) が定着している。NGOや投資家、政府との良い緊張関係が成り立っているからだ。環境教育で育成した人材が、CSRの仕組みを支えている。

北欧最大のホテルチェーンであるスカンディックホテルの玄関には、「ノルディックスワン」の旗が誇らしげに高く掲げられている。ノルディックスワンは、北欧エコラベリング委員会が認証するエコマークだ。同ホテルのCSR責任者のジャン・ピーター氏は、「我がホテルがノルディックスワンのホテル認証取得第1号だ」と自慢げに語る。

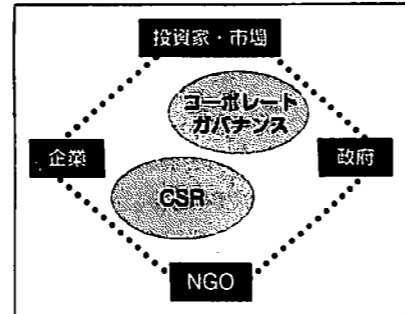
ピーター氏は、「CSRはもはや顧客満足のためのものではない。シェアードバリューこそが経営者の最大の仕事だ」と続けた。ここでいうシェアードバリューとは、社会とサス

テナビリティ (持続可能性) の価値を共有すること。企業がこうした認識の下で事業を展開しているからこそ、スウェーデンではCSRが本質的に機能しているといわれるのだろう。

企業向けのCSRコンサルティング事業を提供するスウェーデンのハルバルション アンド ハルバルションのトミー・ポリュルンド・シニアコンサルタントは、「スウェーデンの企業は、投資家とNGO、行政、市場のプレッシャーの中で生きている」と説明する。企業は投資家からCSR活動の詳細情報を求められると同時に、NGOから高く評価されることを目指している。CSRは、企業が継続的に成長していくには欠かせない取り組みとして定着している。

スウェーデンのNGOの役割は明確である。企業の問題点を指摘すると共に、企業の素晴らしいところを褒めるという役割を担っている。日本のNGOはスウェーデンのNGOに比べて規模も小さく、企業と完全な

●企業を取り巻く緊張関係



出典: ハルバルション アンド ハルバルション

対等関係にあるとは言い難い。スウェーデンでは、日本に比べてNGOの存在感が圧倒的に強いといえるだろう。

持続可能な社会を支える教育

スウェーデンのCSRの仕組みは、幼児期からの教育によって育成された人材が支えている。環境問題解決のためには、「規制」「技術」「意識改革(教育)」が不可欠と言われるが、スウェーデンの環境政策とその実践には、意識改革に関する2つの要素が強く影響を与えている。1つが「民主主義教育」、そしてもう1つが「子供時代の自然体験を通じた環境教育」だ。

スウェーデンの学校教育では、民主主義教育が実施されていると聞く。ナチュラルステップの創始者の一人であるトリビヨン・ラーティ氏は、

スウェーデン人の気質をこう例える。

グループで旅行に出かけて、ある場所でバラバラに行動するメンバーに、次の場所へ移動するためにグループのリーダーが「集合」の号令をかけたとする。日本人は皆すぐに集まって来て、次の場所に直ちに移動し始める。米国人は、いくら号令をかけてもなかなか集まらない。スウェーデン人は「次に行く場所は本当にそこで良いのか皆で議論しよう」と皆で話し合いを始めるのだという。民主主義教育の浸透が、こうしたスウェーデン人の気質を醸成している。

もう1つが、幼児期に受ける自然体験型の環境教育だ。スウェーデンには、ドイツやデンマークと同様に幼児期からの環境教育の実践例が多く見られ、スウェーデンでは「ムツレ教育」と呼ばれる環境教育プログラムが定着している。ムツレ教育は、「森のようちえん」と呼ばれる幼児教育手法のプログラムの1つである。

ムツレとは、森の妖精の名前だ。子供たちは晴れの日も雨の日も森に出かけ、妖精のお話をベースにした自然体験プログラムを森の中で楽しむ。毎年スウェーデンの未就学児童の約1割が、幼児期にムツレ教育を経験しているという。スウェーデン企業のCSR担当者は、ムツレ教育を受けた人材が少なくない。スウェーデンの持続可能な国づくりは強力な指導者や、重大な事件があったからだけではなく、時間をかけた地道な教育が生み出した成果なのである。

スウェーデンでムツレ教育が生まれたのには、必然性がある。ムツレ教育の発祥である幼稚園は、首都ストックホルムの通勤圏にある。幼稚園のすぐ裏手に広がる森を歩いてすぐに合点がいった。まさに妖精が出



「森のようちえん」では子供たちが晴れの日も雨の日も森に出かけ、ムツレという妖精のお話をベースにした自然体験プログラムを森の中で楽しむ

てきそうな森なのだ。下草は少なく、傾斜は緩やかで、林床には苔が生え、ベリーがなり、キノコの陰から小人や妖精が顔を出してくるような森だった。傾斜が激しく、下草は背丈まで伸び、夏の時期には蚊や蜂に悩まされる、日本の森とは大きく違っていた。この森がすぐそばにあるからこそ、ムツレ教育が生まれたのだ。

ムツレ教育以外にも、スウェーデンには「自然学校」と呼ばれる仕組みが存在する。日本の民間主導型の自然学校とは異なり、自然学校の指導者は市役所内に事務所を構え、各学校に巡回指導に向かう。日本の場合は、学校から数時間を離れた「自然学校」という施設に出かけるのが通例だ。しかしスウェーデンでは、多くの学校の裏に森があるため、自然学校が授業の中に組み込まれている。

北海道よりも緯度の高いところに位置するスウェーデンは、冬が長く日も短い。それでもスウェーデン人は冬でも野外に出て、自然の中で過ごすことを好む。こうした感性や価値が、持続可能な社会作りで世界でいち早く取り組む国民的合意に大きく寄与しているのだろう。

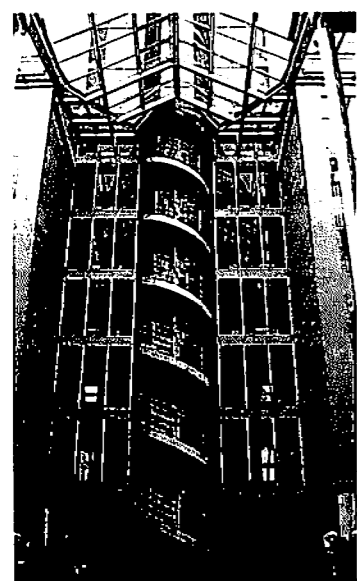
スウェーデンのCSRはさらに次のステップへ進もうとしている。サステナビリティの輸出である。スウェ

ーデン外務省の外郭団体であるスウェーディッシュ・インスティテュートは、ナショナル・ブランド戦略の核に「サステナビリティ」を位置付ける。人口がわずか900万のスウェーデンが世界に貢献するために、ものづくりなどではなく、持続可能な社会の仕組みを提供しようと考えているのである。

里山の原風景で教育を

既に、その動きは顕在化している。輸出先は米国の自治体だ。スウェーデンで数十のエコ自治体作りの実績を持つトリビヨン氏は、「この1~2年は米国からの依頼で猛烈に忙しい。米国の自治体は続々とエコ自治体へと生まれ変わろうとしている」と打ち明ける。

日本は省エネ技術などで世界に優位性を持つ。だが、それだけでは今後のCSRの潮流に取り残される可能性がある。時間がかかっても人材を育成しなければならない。スウェーデンは、妖精の出てきそうな森を使って環境教育を実践し、意識の高い人材を育成してきた。ならば日本は、里山や田んぼ、小川を教育の場として再生すべきではないだろうか。日本の原風景の中でこそ、日本の豊かさの価値を再発見できるはずだ。



北欧最大のホテルチェーンであるスカンディックホテル。玄関には北欧のエコマーク「ノルディックスワン」の旗が掲げられ、ホテル内にも掲示されている